

自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成する中学校外国語科学習指導の工夫 — フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりを通して —

尾道市立美木中学校 松原 夏紀

研究の要約

本研究は、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成する学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、「自分の考え方や気持ちを即興で伝える力」を「話す内容を前もって準備せず、相づちやつなぎ言葉を活用することによって不適切な間を生じることなく、互いに理解し合うために質問を投げかけながら、自分が伝えようとする考え方や気持ちなどを、適切な表現を用いて聞き手に正しく伝わるように話す力」と整理した。この力を育成するために、フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりを行った。その結果、会話を継続・発展させながら、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力が高まった。このことから、フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れることは、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成することに有効であるといえる。

キーワード：即興 やり取り 会話の方略 フォーマット

I 研究題目設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年、以下「29年指導要領」とする。）の「話すこと〔やり取り〕」の目標には「（ア）関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようになる。」^①とあり、日常的な話題や社会的な話題に関して、自分の考えたことや感じたこと、その理由などを即興で述べ合うことができるようになることが求められている。

平成27年度「英語教育改善のための英語力調査事業（中学校）報告書」（以下、「報告書」とする。）によると、授業において「与えられた話題について、即興で話す活動をしていましたと思う」生徒の割合は49.6%であり、即興で話す活動を経験した生徒の割合が、約半数にとどまっていることが明らかになった。また、同調査の「話すこと」の「意見陳述問題」において、「自分の言葉で十語以上は話して、適切な文法や表現を用いている。誤りがあつても理解には影響しない。」と判断された生徒は14.1%と少ない^②。即興で話す経験を通して、自分の考えを伝えるための言語材料や、会話を継続し発展させていくための方略を習得させる指導の工夫が十分になされていないものと考える。

そこで、本研究では、フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元モデルを提案する。まず、帯学習として、与えられた話題について即興的な受け答えが必要なペア・ワークを取り入れる。ま

た、フォーマットを用いて会話を継続し発展させる方略の指導を行い、課題解決型言語活動として、自分の考え方や気持ちをALTに即興的に伝える必然性のある活動を取り入れる。フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた指導を行えば、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力が高まると考え、本題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 「自分の考え方や気持ちを即興で伝える力」について

(1) 「自分の考え方や気持ち」を表現させることについて

中学校学習指導要領（平成20年、以下「20年指導要領」とする。）の「話すこと」の指導事項の一つに「自分の考え方や気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。」^③が示されている。中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年、以下「20年解説」とする。）は、「この指導事項は、適切な声量で明瞭に話すなど聞き手を意識し、的確な英語を使って、大切なところは強調して話したり、聞き手が分かりにくいところは繰り返したり他の表現で言い直したりなどして、『聞き手に正しく伝える』ことを示した活動である。」^④としている。

また、平木裕（2016）は、「自分自身の『考え方』や『気持ち』は、当然それぞれで異なるはずである。

そういういた考えや気持ちを抱き、それを言葉で表現するためには、具体的で分かりやすい場面や状況を設定した上で、どのような表現をすればどのような考え方や気持ちが伝わるかを例示することが必要になってくる。」⁴⁾と指導の工夫の重要性を述べている。

自分の考え方や気持ちが正しく伝わるように表現したり、相手の考え方や気持ちについて、分からぬことを尋ねたりすることを通して、互いに理解し合うことができる。このような日常的に行っているコミュニケーションを、外国語で成立させる力が求められていることを踏まえ、本研究では、やり取りする内容として「自分の考え方や気持ち」を表現させることを重視する。

(2) 「即興で伝える」とは

「即興で伝える」ことは、「29年指導要領」で新たに設定された「話すこと〔やり取り〕」の領域において、目標を達成するための重要な条件として掲げられたものである。中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年）には、「『即興で伝え合う』とは、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取りことなく、不適切な間を置かず相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである。」⁵⁾と述べられている。

また、道面和枝（2009）は、中学校第2学年における「2分間チャット」の取組を実践し「4秒以上間が空かない」ことをルールに取り入れた。具体的には「コミュニケーション・ストラテジー（あいづち・つなぎ言葉・聞き返しなど）を使う練習」を通して、会話の継続のさせ方を学ばせ「2文以上で答える」「さらに質問する」といった「相互に情報を伝え合う（two way）練習」を通して、会話の発展のさせ方を学ばせるという指導を行っている⁽²⁾。

即興でのやり取りで不適切な間を生じないためにには、相づちを打ったり、一問一答で終わることなく、互いに理解し合うための質問をしたりすることが重要であると考える。

これらのこと踏まえて、本研究では「即興で伝える」とは、「話す内容を前もって準備せず、相づちやつなぎ言葉を活用することによって不適切な間を生じることなく、その場で考えた自分の考え方や気持ちなどを伝えること」とする。

(3) 「自分の考え方や気持ちを即興で伝える力」とは

(1) (2) より、本研究では、「自分の考え方や気持ちを即興で伝える力」を、「話す内容を前もつ

て準備せず、相づちやつなぎ言葉を活用することによって不適切な間を生じることなく、互いに理解し合うために質問を投げかけながら、自分が伝えようとする考え方や気持ちなどを、適切な表現を用いて聞き手に正しく伝わるように話す力」とする。

2 フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりについて

(1) 「会話の方略」について

図1は、「報告書」における「話すこと」についての分析結果から見えた課題と、道面（2009）の実践を受けてまとめた、本研究における「会話の方略」を示したものである。

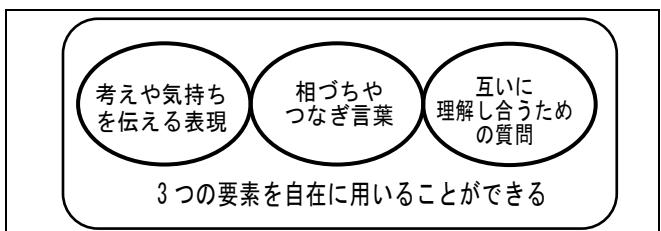


図1 会話の方略

ア 「考え方や気持ちを伝える表現」について

「20年指導要領」には言語活動の取扱いについて配慮すべき事項として、「実際に言語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。」⁶⁾と示されている。このことについて「20年解説」では、「言語の使用場面」や「言語の働き」についての具体例として、「考え方や意図を伝える」場面において、I thinkやI agreeなどの表現を用いた例文が挙げられ、「気持ちを伝える」場面において、Thank you very much.やI'm sorry.などの例文が挙げられている⁽³⁾。

即興で自分の考え方や気持ちを伝えるためには、様々な表現の例を知った上で、適切な表現を即座に選択して用いることができるようになる必要がある。このことは「会話の方略」を指導するに当たって、不可欠の要素であると考える。

イ 「相づちやつなぎ言葉」について

会話を続けるための指導事項として、「20年指導要領」には「つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。」⁷⁾が示されている。

「20年解説」では「つなぎ言葉」の例としてLet me seeやWellなどを挙げている。また、「いろいろな工夫」として、「相手が話しやすいように、I seeやSureなど、相づちをうつ表現を適宜用いる」ことを挙げ、

この指導事項は「紋切り型の応答や一往復だけの言葉のやりとりで終わってしまうのではなく、必要な表現や技法を用いて会話を継続・発展させることを示している。」⁸⁾ものであるとしている。

沈黙による不適切な間を生じることなく、コミュニケーションを継続できるようにするために、「相づちやつなぎ言葉」などを自在に使えるように指導する必要があると考える。

ウ 「互いに理解し合うための質問」について

「20年解説」には、先に述べた会話を続けるための指導事項としての「いろいろな工夫」の一つに、「会話を始めたり発展させたりするために、相手に質問をする」⁹⁾ことを挙げている。また、道面(2009)は「会話の発展のさせ方のコツ」の一つに「質問する。」ことを項目として挙げ、相手にさらに詳しく質問をするということは、「相手のことを分かろうとする気持ち」が根幹にあるということであり、それはコミュニケーションの基本に触れるものだと述べている⁽⁴⁾。

これらのことから、互いに理解し合って会話を発展させるためには、自ら質問を投げかけられるようになることが「会話の方略」を指導する視点として重要であると考える。

(2) 「フォーマット」とは

「報告書」には、即興的に応答する力を高めるための指導改善のポイントとして「話す活動を段階的に行うにあたっては、表現の例や、会話を展開するための話の流れのフォーマットを提示する。」¹⁰⁾ことが挙げられている。

樫葉みつ子(2008)は、「双方向のチャットが成立し、そして続くように、安心して頼ることのできるひとつの型として、『受ける・ふくらます・返す』を強調するのです。」¹¹⁾と述べている。樫葉(2008)は、これはあくまで基本形にすぎず、生徒が自由に会話することに慣れないうちは、この「型」を抛り所としてチャットを楽しみ、次第にその型を飛び出して自由に会話を展開していくことを期待するものであるとしている⁽⁵⁾。

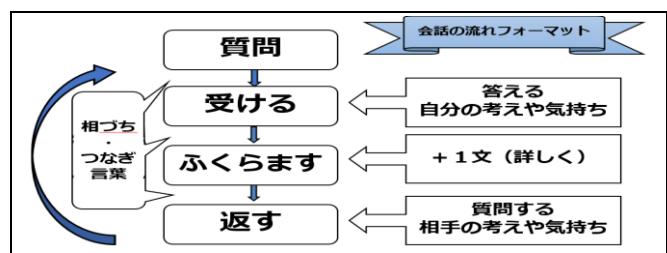


図2 フォーマット

図2は、樫葉(2008)及び、先に述べた道面(2009)の実践に、本研究での「会話の方略」を融合させ、「双方向のやり取りを成立させ、会話を継続し発展させるための、基本的な話の流れを示した型」として開発した、本研究における「フォーマット」を示したものである。

ア 「受ける」について

樫葉(2008)は「『受ける』とは、Aさんが言ったことに、Bさんがきちんと反応をすることです。聞いてるという態度であったり、聞いたことに対する感情表現であったり、質問された事への返答であったりします。」¹²⁾と述べている。また、目標や生徒の実態に応じて、Pardon?やReally?などの「リアクションワード」を豊富に紹介し、それらをチャットで使うことを奨励している⁽⁶⁾。

この考え方と、本研究の「会話の方略」を照らし合わせると、与えられたトピックや、相手からの質問を受けて返答をすることは「自分の考えや気持ちを伝える」ことに関連している。また、リアクションワード等を用いて、相手の話したことに対して何らかの反応をすることは「相づちやつなぎ言葉」を活用することに関連するものであると考える。

イ 「ふくらます」について

樫葉(2008)は「『ふくらます』とは、提供された話題をもっと発展させるために、Bさんが、何らかの情報を付け加えることを指します。」¹³⁾と述べている。具体的に「1文を加えること」であるとして「たとえば、“Do you like coffee?”という質問に対して，“Yes, I do.”と答えるだけでなく，“I drink coffee every day.”といった1文を加えられることです。説明、理由、感想などを言うことで、やりとりする情報が増えて、話題が発展しやすくなります。」¹⁴⁾と説明している。

このことは、本研究の「会話の方略」における「自分の考えや気持ちを伝える」ことに関連している。一問一答ではなく「1文を加えること」が会話を発展させていく上で重要であると捉える。

ウ 「返す」について

樫葉(2008)は、「『返す』とは、Bさんが質問をして、チャットの主導権をAさんに返すことです。相手に話す機会を戻すことで、話題はさらに続きます。」¹⁵⁾と述べている。このことについて、具体的には「質問すること」であるとして、「相手にチャットの主導権を返すために、また、話題を盛り上げるために、質問は大きな役割を果たします。」¹⁶⁾「次に、もっと詳しい質問ができるように、5W1H質

問などをチャットに取り入れます。」¹⁷⁾と説明している。

このことは、本研究における「会話の方略」の「互いに理解し合うための質問をする」とこと一致するものである。

(3) 「フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくり」とは

これまでのことを踏まえて、本研究では、中学校第2学年において、図2のフォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりを通して、即興でやり取りする力の育成を目指す。図3は、本研究の単元構想図を示したものである。

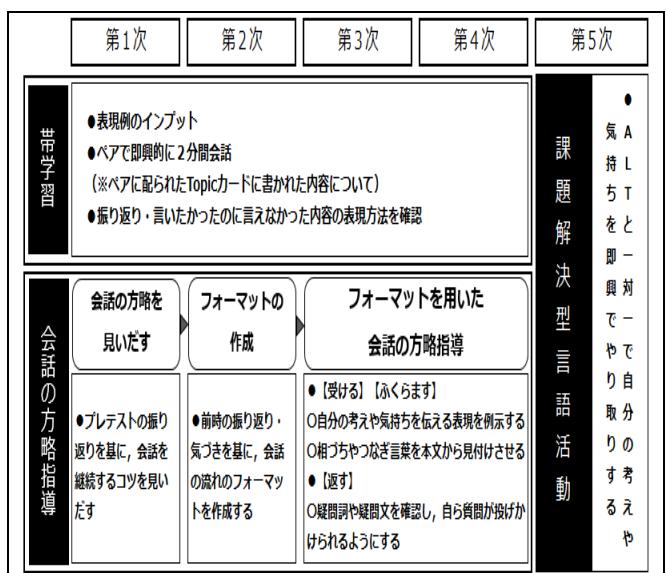


図3 単元構想図

ア 「帯學習」と「フォーマットを用いた会話の方略指導」について

授業以外で日常的に英語を用いてコミュニケーションをする機会が非常に少ない日本の環境において即興で伝える力を育成するためには、授業で即興的な受け答えが必要な会話を多くの与え、経験を積ませることが重要であると考え、単元に帯學習としてペアでの会話練習を取り入れる。

帯學習では、生徒にとって身近な話題で、お互いの情報に差があるものを取り上げ、例えばWhat do you do when you have free time?のような質問を書いた「Topicカード」を事前に作成しておく。毎時間の帯學習では、各ペアにカードをランダムに配布し、生徒は配られたカードに書かれたTopicについて、ペアで2分間即興でやり取りをする。最初は、表現が思いつかないことなどにより、コミュニケーションの挫折が生じることが推測される。そこで、「言い

たかったのに言えなかった内容」をどうすれば伝えられるかを考えたり、表現例をインプットしたりして、経験を積むごとに、帯學習での会話が表現も内容も、より豊かになっていくように指導していく。

フォーマットを用いた会話の方略指導では、まずプレテストの振り返りを基に、会話の方略を見いだせる。さらに、生徒が帯學習でのやり取り内容を踏まえて、どうすれば会話を継続し発展させることができるかを考え、基本的な話の流れを示した型としてフォーマットを作成する。そのフォーマットを用いながら、「受ける」「ふくらます」段階で役立つ「自分の考えや気持ちを伝える表現」を例示したり、どんな「相づちやつなぎ言葉」が使えるかを教科書の本文中から見付けさせたり、「互いに理解し合うための質問」を投げかけて「返す」ことができるよう、疑問詞や疑問文の確認をするなどして、会話の方略を具体的に指導していく。

このように、帯學習での経験を踏まえて、会話の方略やフォーマットが導き出され、帯學習で言いたかったのに言えなかった内容等を受けて、フォーマットを用いた会話の方略指導で取り扱う言語材料の幅が広がる。この2つの指導がスパイラルに絡み合うことで、自分の考えや気持ちを即興で伝える力を高めることができると考える。

イ 「課題解決型言語活動」について

今井典子・高島英幸(2015)は、「課題解決型言語活動とは、『与えられた（あるいは、自ら発見した）課題を、学習者が言語能力を駆使して達成する言語活動』である。」¹⁸⁾と述べており、課題を解決するまでに、分からぬことを尋ね、情報を得るために話をし、伝えるために教えるなど、日常生活で行われるような活動が中心となり、ゴールに到ることが求められるものであるとしている。

生徒に目的意識を持たせ、主体的に単元の学習に取り組ませるために、英語を用いて互いの考え方や気持ちをやり取りする必然性を感じられる、リアルな場面や状況の設定をすることが重要であると考える。本単元では、ALTと一緒に旅行の計画を立てるという内容で、生徒とALTが一対一で旅行についての自分の考え方や気持ちを即興でやり取りする活動を設定する。お互いの考え方を出し合って行先やしたいこと、どんなお土産を買うかを相談し、詳細を決定することを目指す。帯學習で積み重ねた即興でやり取りする経験を基に自分たちで導き出した会話の方略や、フォーマットを土台にして、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を高めさせたい。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりを行えば、自分の考えや気持ちを即興で伝える力を高めることができるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表1に示す。

表1 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
自分の考え方や気持ちを即興で伝える力が高まったか。	プレテスト ポストテスト
フォーマットを用いた会話の方略指導が、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成することに有効であったか。	事前アンケート 事後アンケート プレ・ポストテストの生徒の発話分析

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期間 平成29年7月3日～平成29年7月14日
- 対象 所属校第2学年（2学級46人）
- 単元名 Unit3 Career Day
- 目標

何かをする目的や、将来の夢など自分のしたいことなどについて、自分の考え方や気持ちを即興で尋ねたり伝えたりする。

2 指導計画（全5時間）

次	時	学習活動
一	1	【会話の方略を見いだし】 ○プレテストの振り返りを基に、会話の方略を見いだし、自分の考え方や気持ちを伝える表現の例を練習して使えるようになる。
二	1	【会話を継続・発展させる方法をまとめる】 ○前時の振り返り・気付きを基に、会話の流れの「フォーマット」を作成する。
三	1	【フォーマット・会話の方略を用いた会話の練習】 ○話題やパートナーを変えながら、フォーマットや会話の方略を活用して会話練習をする。
四	1	【フォーマット・会話の方略を用いた会話の改善】 ○生徒同士で、与えられた課題について自分の考え方や気持ちを即興でやり取りする。
五	1	【課題解決型言語活動】 ○旅行プランについての自分の考え方や気持ちを、ALTと即興でやり取りする。

V 研究授業の分析と考察

1 自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成することができたか

(1) プレテスト・ポストテスト結果からの分析

プレテストは、「夢の修学旅行」について、ポス

トテストは「夢の海外旅行」について、行きたい場所やしたいことなど自分の考え方や気持ちをペアで即興的に2分間会話するパフォーマンステストを実施した。会話の様子は録画し、発話内容を書き起こしてテストの結果を評価・検証するために用いた。検証は、相づちやつなぎ言葉の活用、不適切な間、互いに理解し合うための質問、考え方や気持ちが適切な表現を用いて正しく伝わった発話の回数の4項目で行い、各項目のB評価以上が、本研究の到達目標を概ね達成したと考える。なお、プレテストは1人、ポストテストは3人が欠席した。

ア 「相づちやつなぎ言葉の活用」について

指導に当たっては、相づちやつなぎ言葉の表現例を示し、帯学習の前にシートを見ながらペアで表現のインプットをした上で、会話練習をさせるという流れを取った。「相づちやつなぎ言葉の活用」についての判断基準を表2に、テストの結果を図4に示す。

表2 「相づちやつなぎ言葉の活用」の判断基準

項目	評価	判断基準
相づちやつなぎ言葉を適切に用いることができたか。	A	適切に用いることができた。
	B	用いているが、適切さに欠ける。
	C	できなかった。

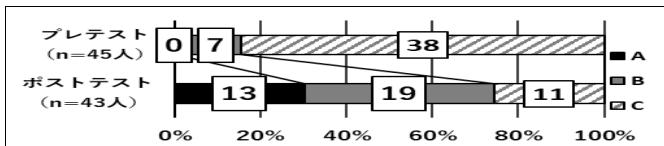


図4 プレ・ポストテストの相づちやつなぎ言葉の活用に関する結果

プレテストでは、相づちやつなぎ言葉を用いることができた生徒は7人と少なかったが、ポストテストでは32人の生徒が、それらを用いて会話を継続させようとしていたことが分かる。また、ポストテストでC評価だった11人の生徒も、帯学習での会話を書き起こした発話内容を分析すると、相づちやつなぎ言葉を活用することができていた。また、プレテストのC評価から、ポストテストでB評価になった生徒は16人、A評価になった生徒は9人であった。テスト後の振り返りには「相づちが使えた。」「練習してからは、相づちやつなぎ言葉が自然に出てくるようになった。」という記述が多く見られた。

これらのことから、表現例のインプットを行った上で即興での会話練習を取り入れた指導を行ったことが、会話の方略の一つとして「相づちやつなぎ言葉」を適切に用いることにつながったと考える。

イ 「不適切な間」について

「不適切な間」についての判断基準を表3に、テストの結果を図5に示す。

表3 「不適切な間」の判断基準

項目	評価	判断基準
コミュニケーションが断絶するほど不適切な間を生じることなく話せたか。	A	沈黙はほとんどなかった。
	B	時々沈黙はあったがコミュニケーションに支障はなかった。(4秒以内の沈黙)
	C	コミュニケーションが断絶する沈黙があった。(4秒を超える沈黙)

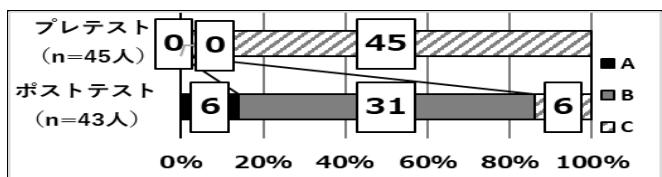


図5 プレ・ポストテストの不適切な間にに関する結果

プレテストでは、全てのペアが2分間会話を継続させることができず、不適切な間を生じたことによるコミュニケーションの断絶を経験した。しかし、ポストテストでは8割を超える生徒が、多少の間はあったとしてもコミュニケーションに支障を及ぼすほどではなく、2分間会話を継続することができた。またポストテストでは、プレテストのC評価からB評価になった生徒が29人、A評価になった生徒が5人であった。テスト後の振り返りには、沈黙せずに会話を継続できた理由として「相づちやつなぎ言葉が使えるようになった。自分の言いたい質問が言えるようになった。質問に対して答えて、さらにふくらませることができた。」「迷ってもフォーマットを思い出して続けられた。」といった記述があった。沈黙が完全に無くなつた訳ではないが、コミュニケーションの断絶を感じることなく、やり取りが成立しているものと捉えた。

これらのことから、フォーマットを用いた会話の方略指導を行ったことにより、不適切な間を生じることなく会話を継続することができるようになつたものと考える。

ウ 「互いに理解し合うための質問」について

「互いに理解し合うための質問」についての判断基準を表4に、テストの結果を図6に示す。

表4 「互いに理解し合うための質問」の判断基準

項目	評価	判断基準
互いに理解し合うために質問をして会話を発展させることができたか。	A	2回以上できた。
	B	1回できた。
	C	できなかつた。

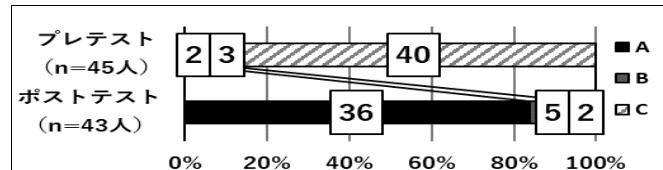


図6 プレ・ポストテストの互いに理解し合うための質問に関する結果

指導に当たつては「互いに理解し合うための質問」ができるようにするために、疑問詞の総復習を行い、様々な疑問文とその考え方をインプットした上で、帯学習としてのペア会話練習を行つた。

プレテストでは自ら質問をすることができた生徒はわずか5人であったが、ポストテストでは41人が、質問をすることで相手の考え方や気持ちを理解しようとすることができた。ポストテストでは、プレテストのC評価からB評価になった生徒が5人、A評価になった生徒が30人であった。

さらに、ポストテストの発話内容には、Where do you want to go?のような、表現例としてインプットした疑問文だけでなく、相手のI want to go to America to watch a baseball game.という発話を受けてDo you like baseball?やDo you know New York Yankees?のような、相手に対する理解を更に深める質問を投げかけているものがあつた。

これらのことから、相手の発話を受けて関連した内容の質問をすることによって、相手のことをより深く理解し、会話を発展させることができるようになつているものと考える。

エ 「適切な表現を用いて聞き手に正しく伝わるよう話すことについて

「適切な表現を用いて聞き手に正しく伝わるよう話すことについての判断基準を表5に、テストの結果を図7に示す。なお、ここでの「適切な表現」とは、本研究で取り扱つた不定詞を主に用いて、何かをする目的や、自分のしたいことなどについて表現したものである。発話後にやり取りされる意味内容にずれが生じていなければ、正しく伝わつたものと捉えた。

表5 「適切な表現を用いて聞き手に正しく伝わるよう話すことの判断基準

項目	評価	判断基準
適切な表現を用いて発話し、聞き手に正しく伝えることができたか。	A	5回以上できた。
	B	3~4回できた。
	C	1~2回できた。またはできなかつた。

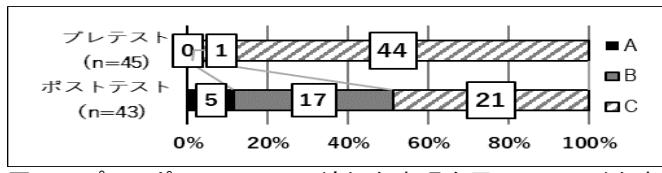


図7 プレ・ポストテストの適切な表現を用いて正しく伝わった回数の結果

プレテストでは、9割を超える生徒がC評価であったが、ポストテストでは43人のうち22人がB評価以上の基準を満たしている。さらに、ポストテストでC評価だった21人の生徒の発話内容を検証すると、プレテストよりも適切な表現を用いて正しく伝わった発話の回数が増加している生徒が20人であった。なお、プレ・ポストとともに0回だった1人の生徒は、ポストテストでI want toと言いたいところを、I went toと発音していたため適切な表現と捉えなかったものであり、個別に指導を行い発音の誤りを修正している。これらのことから、自分の考えや気持ちを伝える表現の例をインプットしたことにより、聞き手に正しく伝わるように、適切な表現を用いた発話が増加したものと捉える。

以上、ア、イ、ウ、エの分析から、本単元を通して、自分の考えや気持ちを即興で伝える力を高めることができたと考える。

2 フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりは、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成することに有効であったか

(1) 事前・事後アンケートの結果による分析

事前・事後アンケートの結果を次の図8に示す。

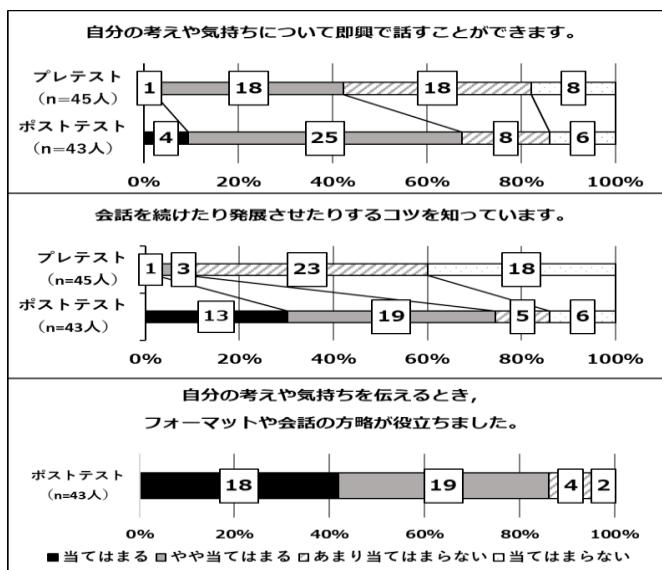


図8 事前・事後アンケートの結果

なお、事前アンケートは1人、事後アンケートは3人が欠席した。事前・事後ともに実施した「自分の考え方や気持ちを、即興で話すことができます。」と「会話を続けたり発展させたりするコツを知っています。」の2つの項目については、いずれも肯定的な回答をする生徒が増加している。また、事後のみ実施した「英語で自分の考え方や気持ちを伝えるとき、フォーマットや会話の方略が役立ちました。」という項目については、43人のうち37人が肯定的な回答をしており、本研究のフォーマットを用いた会話の方略指導は概ね有効であったと考える。

(2) 生徒の記述による分析

フォーマットや会話の方略について、生徒が記述した内容をまとめて表6に示す。

表6 生徒の記述

成 果	○日本語だと自然に会話ができるけど、英語だとぎこちなくなるので、フォーマットがすごく役に立った。
	○フォーマットの流れを意識したら、なんとなく会話ができた。
	○沈黙になりそうなとき、思い出して喋れた。
	○全然できなかつた会話が2分間できるようになった。
課 題	○ふくらますことが難しかった。
	○単語や文法がすぐに思い浮かばない。
	○2人ではなく、4人、班で話してみたい。

アンケートの結果から、単元にフォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れたことで、生徒に、今までより自分の考え方や気持ちを即興で伝えることができるようになったと感じさせる場を設けることができたと考える。また、生徒の記述から、フォーマットが絶対に守らなくてはならない会話の流れの型ではなく、困ったときに思い出すと助けとなり、フォーマットの流れを意識すると会話を継続・発展しやすくなるものとして活用できたことが分かる。

しかし「ふくらますことが難しかった。」という記述をした生徒によると、話の内容に関連した質問をしたり、話題を転換したりすることはできたが、一つの事柄について2文以上で詳しく述べて会話をふくらますことは難しかったという。確かに、一問一答でやり取りが進んでいる場合が多い現状があった。これは、自分の考え方や気持ちを2文以上で詳しく言うことに特化した言語活動が十分でなかったことによるものと思われる。教科書の会話例等を参考にしながら、新しい情報を加えて詳しく伝えることが、自然と会話をふくらますことに繋がるということに気付かせた上で、会話練習をしていく必要がある。また、本研究ではペアでのやり取りに重点を置いて指導を行ったが、話し合うグループの構成人数

を変化させ、よりリアルな場面設定の中において、自分の考えや気持ちを即興で伝える力を育成する指導へと発展させることも可能であろう。

(3) プレ・ポストテストにおける発話内容による分析

プレ・ポストテストにおける、生徒の発話内容の変容を表7に示す。下線部は、本単元の会話の方略指導において取り扱った表現である。

表7 プレ・ポストテストにおける発話内容の変化

【プレテスト】 （※ ●は間が生じたことを示す）	
生徒A : I go ... I go to Okinawa.	
I go to Churaumi Suizoku-kan. I like fish.	
生徒B : Oh, yeah. I want to go to Tokyo.	
生徒A : Oh.	
生徒B : (●) I like Shibuya.	
生徒A : Shibuya.	
生徒B : Yes. Shibuya. (●)	
【ポストテスト】	
生徒A : Where do you want to go?	
I want to go to ...ah...America.	
生徒A : Oh, America.	
生徒B : Yes.	
生徒A : What do you want to do?	
I want to swim in Hawaii.	
生徒A : Oh, really?	
生徒B : Yes. How about you?	
生徒A : I going to Italy.	
生徒B : Oh, Italy! What do you want to do?	
I want to eat pizza. How about you?	
生徒B : How about you???	
生徒A : I like pizza. How about you?	
生徒B : I don't like pizza. I like hamburger.	
生徒A : Pardon me?	
生徒B : HAMBURGER!	
生徒A : Hamburger! Oh, hamburger! Hamburger, me too.	

プレテストでは会話を継続・発展させることが難しかった2人が、本単元での学習を経て、自分の考えや気持ちを伝え、互いに質問を投げかけ、相手の発話を受けて相づちを打ったり、聞き返したりして、日常的に日本語で行っているコミュニケーションに近い形でやり取りを成立させている。この傾向は、他のペアの発話内容にも同様に見られるものであり、フォーマットの流れや会話の方略として学習した内容が概ね具現化されているものと捉える。

以上(1)(2)(3)より、本研究で目指した自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成するために、フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元づくりは有効であったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

帶学習として、ペアで即興的な受け答えが必要な会話を多くの機会を与えて、フォーマットを用いて会話を継続し発展させる方略の指導を行い、課題解

決型言語活動を取り入れた単元づくりは、自分の考え方や気持ちを即興で伝える力を育成することに有効であることが分かった。

2 今後の課題

授業以外で日常的に英語を用いてコミュニケーションをする機会が非常に少ない環境の中で、即興で伝える力は一朝一夕で育成できるものではない。語彙、表現などを活用する場面を、学年の枠を超えて系統的に繰り返し設定することが必要となる。小学校での外国語教科化を目前に控えている現状を踏まえ、小学校との連携を密にしながら、英語を用いて自分の考え方や気持ちを即興で伝える力の育成を進めていくことが重要である。そのために、小中の接続を意識して各学年の発達段階に応じた目標を設定した上で、フォーマットを用いた会話の方略指導を取り入れた単元の流れを、学年の実態に合わせた話題や言語材料を用いて、系統的に進めていくように年間指導計画等を見直し実践していきたい。

【注】

- (1) 文部科学省(平成28年)：『平成27年度「英語教育改善のための英語力調査事業(中学校)」報告書』pp.68-79を参照されたい。
- (2) 道面和枝(2009)：『中2で楽しく会話が続く！「2分間チャット」指導の基礎・基本』明治図書p.14に詳しい。
- (3) 文部科学省(平成20年)：『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂pp.21-28を参照されたい。
- (4) 道面和枝(2009)：前掲書p.71に詳しい。
- (5) 横葉みつ子(2008)：『英語で伝え合う力を鍛える！1分間チャット&スピーチ・ミニディベート28』明治図書p.15に詳しい。
- (6) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.16に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成29年)：『中学校学習指導要領』p.130
- 2) 文部科学省(平成20年)：『中学校学習指導要領』東山書房p.106
- 3) 文部科学省(平成20年)：『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂p.13
- 4) 平木裕(平成28年)：『中学校外国語における指導の充実(32)』『中等教育資料』学事出版p.67
- 5) 文部科学省(平成29年)：『中学校学習指導要領解説外国語編』p.21
- 6) 文部科学省(平成20年)：前掲書p.106
- 7) 文部科学省(平成20年)：前掲書p.106
- 8) 文部科学省(平成20年)：前掲書p.14
- 9) 文部科学省(平成20年)：前掲書p.14
- 10) 文部科学省(平成28年)：前掲書p.21
- 11) 横葉みつ子(2008)：『英語で伝え合う力を鍛える！1分間チャット&スピーチ・ミニディベート28』明治図書p.15
- 12) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.15
- 13) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.15
- 14) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.16
- 15) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.15
- 16) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.16
- 17) 横葉みつ子(2008)：前掲書p.15
- 18) 今井典子・高島英幸(2015)：『小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型言語活動—自立する言語使用者の育成—』東京書籍p.20